

## 二宮金次郎の像について ~その4~

尊徳は1856年（安政3年）に下野国今市村（現在の栃木県日光市）で没します。江戸時代後期を生き延びた人でした。尊徳がより広く世の中の人に知られるようになったのは、報徳思想を受け継いだ門人の一人、富田高慶が1881年（明治14年）尊徳の伝記『報徳記』を著してからです。1883年（明治16年）には宮内庁版「報徳記」が発行され、知事以上の役職者に配付されました。さらに多くの役人に読ませるため、1885年（明治18年）には農商務省版も刊行されました。

没後35年経った1891年（明治24年）に従四位（もし存命であれば陸軍・海軍では中将相当とされ、華族に準ずる礼遇として位置づけられていた）が追贈されています。

この年、作家の幸田露伴が、少年少女向けの「少年文学」の中で、報徳記を基にした子ども向けの「二宮尊徳翁」を提示し、後に刊行されます。この時の挿絵で、はじめて薪を背負って歩く姿が使われました。

もちろん尊徳が薪を背負いながら本を読んで歩く姿（「振薪読書図」と呼ばれる）に関する記述は、『報徳記』が初出です。そこには「大学の書を懐にして、途中歩みなから是を誦し、少も怠らず。」とあります。この「書を懐にして」を、「懐中」とするのが一般的ですが、金次郎像では「胸の前で持って」と解釈されています。先述したようにこのような姿で実際に歩いていたという事実があったかはどうかはわかりません。

1894年（明治27年）内村鑑三は「代表的日本人」の中で、経済行為の基礎としての道徳を説いた尊徳を肯定的に評価しています。やはり尊徳は農民ではなく、体験を通して経済を深く理解していた人だったのでしょう。

そしていよいよ尊徳が教育の場に登場します。1900年（明治33年）の検定教科書「修身教典」に載り、1904年（明治37年）から使用された最初の国定教科書「尋常小学修身書」では孝行・勤勉・学問・自営という4つの徳目を代表する人物として描かれました。

また唱歌では1902年（明治35年）の幼年唱歌に現れ、1911年（明治44年）の尋常小学唱歌には「柴刈り縄ない草鞋をつくり、親の手を助け弟を世話し、兄弟仲良く孝行つくす、手本は二宮金次郎」と歌われています。作詞・作曲者は不詳です。

1924年（大正13年）没後68年、遂に尊徳は像にされました。薪を背負いながら本を読んで歩く姿の「負薪読書の金次郎像」が、愛知県前芝村立前芝高等尋常小学校（現豊橋市立前芝小学校）に建てられました。

金次郎の像が、盛んに全国の小学校に建立されるようになったのは、1932年（昭和7年）日本が戦争に突入した頃からです。「教育勅語の徳目と相まって、勤勉や儉約等がクローズアップされ、それを促進するため象徴化されることで国策に利用される形で銅像建立が全国展開されるに至った」のです。1937年（昭和12年）は金次郎生誕150年にあたることから銅像建立のピークとなりました。そして、1940年（昭和15年）紀元（初代天皇の神武天皇が即位してから）2600年という国家イベントを迎えます。